

西浅井町塩津港遺跡発掘調査 現地説明会資料

開催日 平成 18 年 (2006) 12 月 2 日 (土)
 調査主体 滋賀県教育委員会文化財保護課
 調査機関 財団法人滋賀県文化財保護協会

塩津港遺跡は琵琶湖の最北端に流入する大川（塩津川）の河口に位置します（滋賀県伊香郡西浅井町塩津浜地先）。平成 18 年 7 月に試掘調査を行い、同年 10 月から本格的な発掘調査を実施しています。この度、平安時代後期～鎌倉時代前期にかけての石組遺構 1 基や礎石建物跡 1 棟、掘立柱建物跡 2 棟が、琵琶湖の基準水面（T.P84.371 m）以下の標高 T.P83.70 m 付近で見つかりました。そして周辺には、灯明用を含む土師器皿片等が破碎されて大量に散布することなどから、石組遺構は塩津港にかかわる宗教施設（神社あるいは仏堂）であったと推定されます。

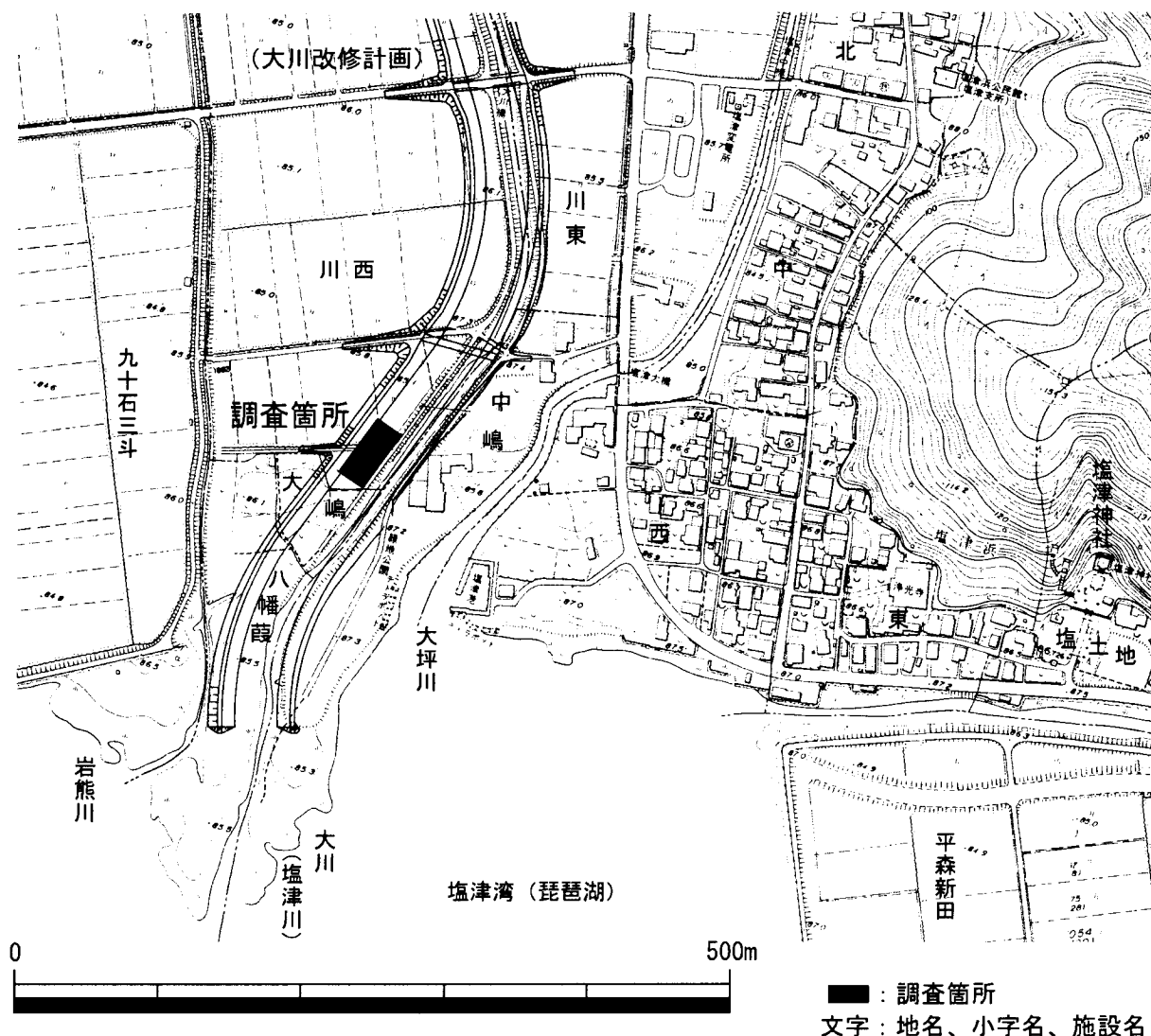
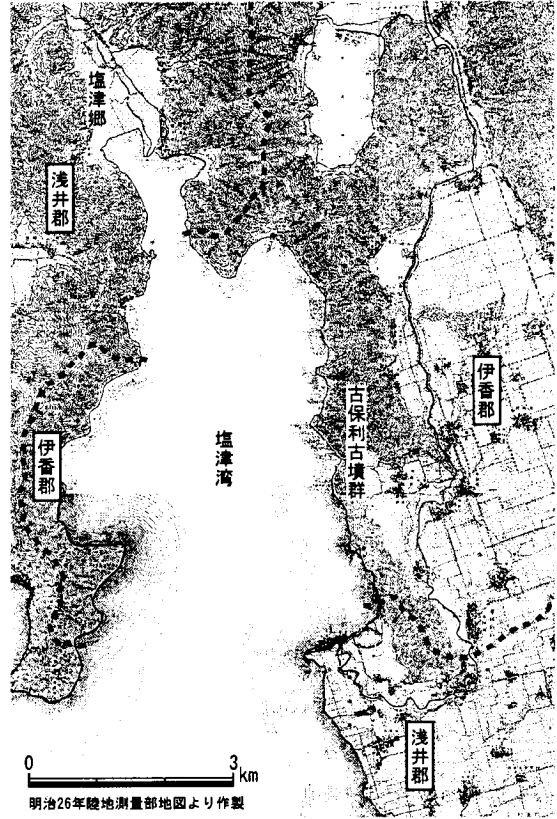


図 1 調査箇所の位置

1. 歴史的な位置

塩津港遺跡の所在する西浅井町は伊香郡に属していますが、明治13年(1880)以前は琵琶湖を挟んで浅井郡に属していました。平安時代につくられた『倭名類聚抄』には浅井郡塩津郷がみえ、『延喜式』にも浅井郡塩津神社がみえます。このことは、当地が琵琶湖上交通と深く結びついて発展してきたことをよく示しています。

塩津は海津(高島市マキノ町)・大浦(伊香郡西浅井町)とともに湖北三湊の一と言われ、古代以来、畿内と北陸とを結ぶ重要な港でした。塩津湾をのぞむ古保利丘陵上に県内最大級の古保利古墳群が築かれ、さらに当地の北西方向に前方後円墳一基・円墳三基から構成される塩津丸山古墳群が築かれたのも、こうした地理的位置によるとされます。律令に対する施行細則「延喜式」では、越前・加賀・能登・越中・越後・佐渡の北陸六カ国から



----- : 明治13年(1880)以前の浅井郡と伊香郡の郡界
 塩津郷付近は明治13年に西浅井郡として分離、明治30年には伊香郡に編入し、現在は伊香郡西浅井町に属す

図2 古代の伊香郡と浅井郡

の物資は敦賀に集め、そこから塩津街道によって塩津に運んだのち琵琶湖上を大津に運漕し、平安京に進上することになっていました。「塩津」の地名は塩の中継港であったことに由来するとも伝えられます。

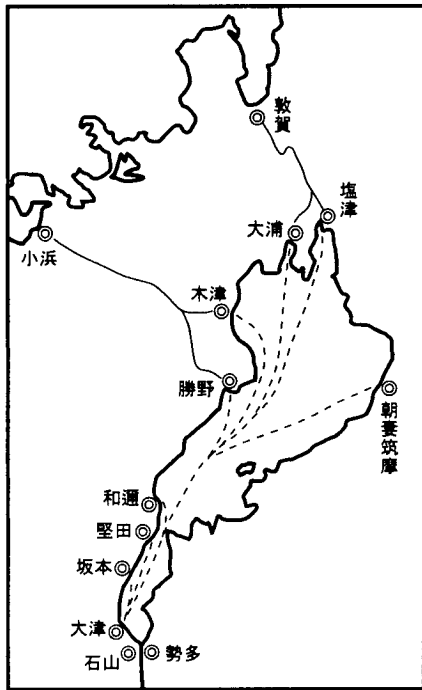


図3 古代の琵琶湖航路

「高島の阿渡の水門を漕ぎ過ぎて塩津菅浦今か漕ぐらむ」。『万葉集』にこのようにみえるように、塩津港を詠んだ歌は数多く、日本史の表舞台にもたびたび登場します。たとえば、天平宝字八年(764)、反乱をおこして平城京を脱出した藤原仲麻呂(恵美押勝)は越前への逃亡をはかって琵琶湖上を塩津に向かっていきます(『続日本紀』同年九月一八日条)。長徳二年(996)九月、紫式部は父の藤原為時とともに越前へ下向した時「知りぬらむ往来にならず塩津山世に経る道はかるきものぞと」と詠んでいます(『紫式部集』)。そして、寿永二年(1183)四月、平家の軍勢は木曾義仲を追討するため、「塩津宿」を通って北国に至っています(『源平盛衰記』)。

今回、見つかった石組遺構等はちょうどこの前後の時期からおおよそ250年間、つまり平安時代後期～鎌倉時代前期にかけて機能していたと推測されます。

2. 調査成果

遺跡の中心となる石組遺構は、平安時代後期～鎌倉時代前期の約 250 年間にわたって機能していたと推測されます。石組は幅約 70 cm の石罫で、規模は外法で南北約 7.1 m、東西は約 7.6 m 以上を測ります。その内側には礎石や掘立柱がない一方、北辺に沿って南北 2.6 m、東西 1.9 m 以上の方形の石積基壇が作られていることから、ここに小さな建物が存在したことがわかりました。おそらく小祠ないし小堂が安置されていたとみられ、外側の石罫はそれを取り囲む結界としての玉垣の可能性も指摘されます。そして、その南庭を囲うようにして礎石が並び、周辺には灯明用を含む土師器皿片等が破碎されて大量に散布するとともに、先端の焼けた木片や木炭片も数多く散らばっています。おそらく、ここで火を使った宗教行為が行われていたと推測されます。

今回みつかった石組遺構は、灯明皿を含む土師器皿がコンテナ（深さ 15 cm × 幅 35 cm × 長さ 55 cm）25 箱分以上にも及ぶほどに大量消費さ

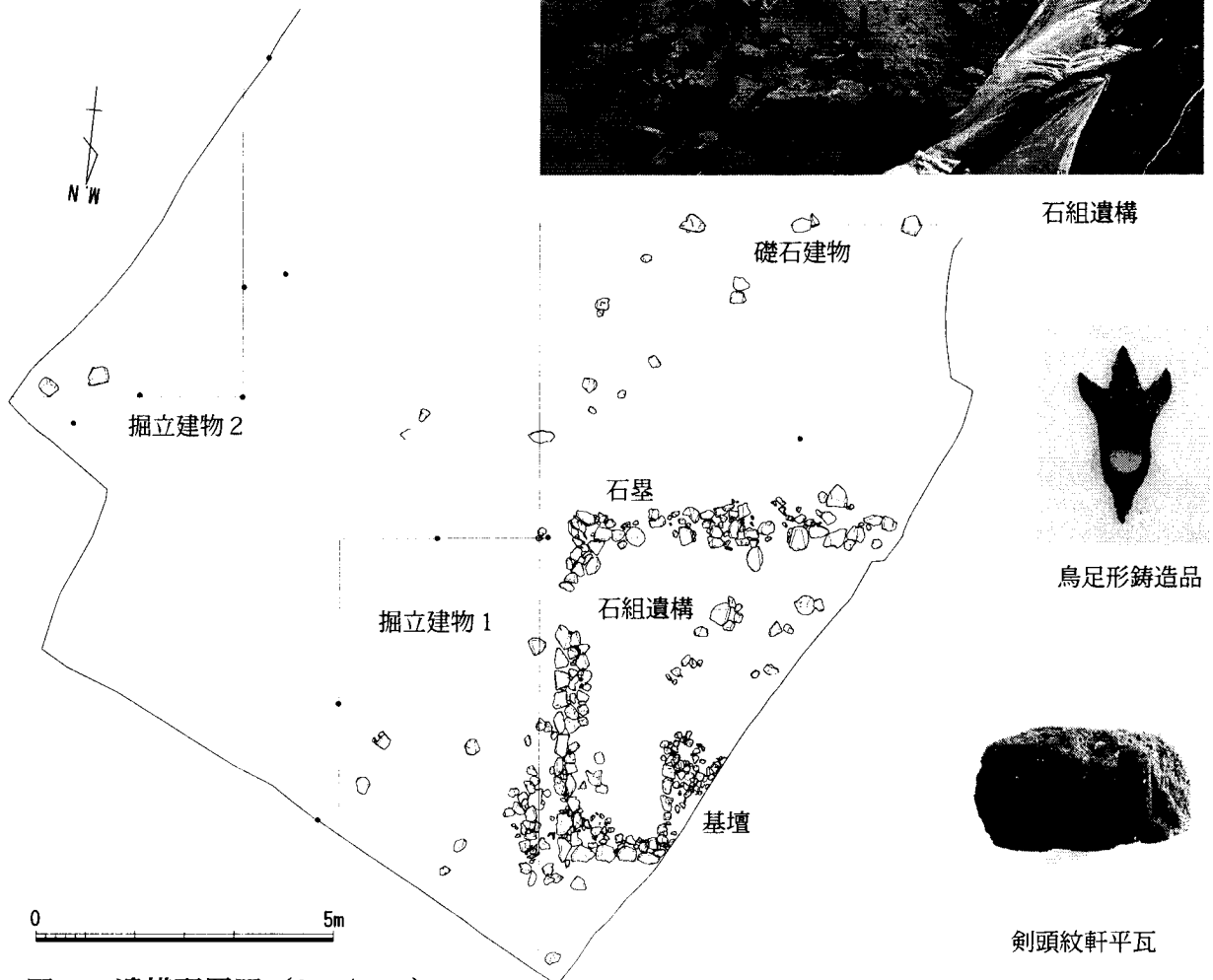


図4 遺構配置図 (S=1/150)

れていること、また調査箇所南側の小字名が「八幡葎」であることなどから、神道系の宗教施設（神社）が存在した可能性が高いと推測されます。一方で、出土した鍍金痕のある鳥足形鉄铸造品は仏具の可能性もある荘厳具とみられること、また、仏堂と結びつくことが多い屋根瓦も出土することから、ここには仏教系の宗教施設（仏堂）があった可能性もあります。ただし、今回見つかった遺構の性格のこうした不分明さは、実は神仏の習合が進んだ時代の雰囲気の色濃く反映しているのかもしれませんが。

なお、今回の調査では、皇朝十二銭の一つである「隆平永宝」1枚も出土しました。延暦十五年（796）の発行です。この銅銭自体は鎌倉時代も流通していたようですが、出土する遺物のなかには奈良時代にさかのぼる須恵器や土師器もあり、また、それに後続する時期の遺物として緑釉陶器や二彩陶器、中国製磁器などの高級陶磁器の出土をあげられます。いまのところ、奈良時代にさかのぼる明確な遺構はみつかっていませんが、今回みつかった石組遺構には、前身施設があった可能性もあります。

3. まとめ

今回の調査成果は、大きく二つにまとめることができます。

①近江（滋賀県）に暮らす人々は琵琶湖とともに豊かな歴史をはぐくんで来ました。今回、現在の琵琶湖の基準水面（T.P84.371 m）より約67 cmも標高が低いT.P83.70 m付近で、平安時代後期～鎌倉時代前期にかけて機能していた本格的な遺構が見つかったことは、琵琶湖をめぐる当時の環境復元に重要な手がかりを与えてくれます。今後、そうした視点から近江の歴史を描き直すという研究も進展することでしょう。

②塩津は畿内と北陸とをむすぶ重要な物流拠点として、古代より重要視されながら、これまでその実態はまったく不明でありました。今回、塩津港推定地の琵琶湖畔において、はじめて考古学的な調査が行われ、平安時代後期～鎌倉時代前期にかけて機能していた宗教施設（神社あるいは仏堂など）とみられる石組遺構や礎石建物、掘立柱建物群が見つかったことは、歴史の深い霧のなかにあった塩津港に関係すると考えられる施設の一端が、よくやくその姿を現しはじめたことを示しています。

調査箇所の小字名は「大嶋」であり、大川（塩津川）の向かいには小字「中嶋」があります。明治時代の地籍図では、小字「中嶋」が飛び石状の洲（しま）形に描かれていることを考慮すると、調査箇所もかつては「大嶋」とよばれる洲であったのかもしれませんが。もし、そうであるとするなら、大川河口の塩津港には「大嶋」と「中嶋」というふたつの洲がならび、今回みつかった「大嶋」上の宗教施設で湖上交通の安全や、外来する疫病の退散、あるいは商売の繁盛などを祈願している情景も思い浮かべられます。歴史の表舞台にもたびたび登場した塩津港は今後、その実態があきらかになるにつれ、新たな日本史像を描く手がかりを与えてくれることとなるでしょう。



鎌倉時代末頃～南北朝時代の竹生島
（『菅浦与大浦下荘境絵図』）